

# 第23回世界神経学会議 開催結果報告

## 1 開催概要

- (1) 会議名 : 和文名 : 第23回世界神経学会議  
          英文名 : XXIII World Congress of Neurology (略称 : WCN2017)
- (2) 報告者 : 第23回世界神経学会議組織委員会 委員長 水澤 英洋
- (3) 主催 : 第23回世界神経学会議組織委員会、日本学術会議
- (4) 開催期間 : 平成29年9月16日(土)～21日(木) [6日間]
- (5) 開催場所 : 国立京都国際会館(京都府京都市)
- (6) 参加状況 : 115ヵ国/5地域・8,641人(国外3,530人、国内5,111人)

## 2 会議結果概要

- (1) 会議の背景(歴史)、日本開催の経緯 :

・世界神経学会議(World Congress of Neurology, WCN)は、世界神経学連合 (World Federation of Neurology, WFN)が、当初は4年ごとに、第19回以降は2年ごとに開催している神経内科学(神経学)の分野で唯一かつ最も歴史のある国際会議であり、1931年の第1回から2017年の本会議で23回を迎える。

日本での2017年の第23回世界神経学会議(WCN 2017)は、第12回大会以来36年振り2度目で、本学会を2度開催したのは、これまでロンドン、ウィーンしかなく大変名誉なことである。2013年ウィーンで開催された第21回世界神経学会議でのWFN総会で、本学会の京都開催が正式に決定された。今回はアジア、オセアニア地区での開催地決定であり、初めての立候補である韓国・ソウルならびに中国・香港の激しい誘致運動に対して、開催の栄誉を勝ち取れたのは、本分野における日本および日本人医師・研究者の長年の貢献が国際的に認められたとともに、アジアならびに世界に於ける日本のリーダーシップがより一層期待されていることによると考えられる。すなわち、アジア、オセアニアそして世界の神経内科学の大きな発展への貢献が期待されている。

・神経内科では、アルツハイマー病を始めとする認知症疾患、てんかん、パーキンソン病などのよく見かける疾患からプリオン病のような希な疾患まで、また脳卒中のような救急疾患から脊髄小脳変性症のような慢性疾患まで、頭痛のように良く治る疾患から筋萎縮性側索硬化症のような難病まで、さらにはギラン・バレー症候群などの末梢神経疾患、筋ジストロフィーなどの筋肉疾患、起立性低血圧症など自律神経疾患をも含む大変広汎な疾患群を対象として、それらの診療はもとより病態の解明、診断・治療法の開発など研究も行っている。それを支える神経内科学の広がりには多彩で、神経生理学、神経画像医学などの伝統的な領域から、神経再生医学、神経免疫学、神経分子遺伝学など最先端のフロンティアまで、いずれも長足の進歩がみられ、神経難病として不治の病の代名詞であった神経変性疾患にも根本的治療法が開発される時代となっている。

高齢化が進む日本や世界にとって、認知症を含む神経疾患は重要な課題であり、この第23回世界神経学会議(WCN2017)では、これら喫緊の課題に対して、わが国の誇るiPS細胞・ロボット・BMI (Brain Machine Interface)など最先端の研究成果の発信から、スモン、水俣病など環境問題先進国としての貢献も含め、国際的な研究成果の発表・情報交換の場を提供し、社会への啓発、国際的人材交流、産学の連携を推進して、社会に役立つ神経内科学をアピ

ールする。それによって、わが国のみならず急激に発展するアジアを中心とした世界の神経内科学の発展に大きく寄与するものと期待される。

- ・ WCN 2017 のメインテーマは “Defining the Future of Neurology” であり、わが国から明日の新しい神経内科学を世界に発信する。

(2) 会議開催の意義・成果：

- ・ 本学会の使命は、神経内科学の診療、教育、研究に関わる最新の成果について、国際的な発表と情報交換の場を提供し、世界的な交流、産学の連携、社会への啓発を推進することである。世界、とくに、アジア・オセアニアにおける神経内科学の発展に大きく貢献するものと期待される。
- ・ 9月16～21日の会期中に121ヶ国・地域から8641名もの、これまでの本会議の歴史の中で最大の参加者があり、3名のノーベル賞受賞者を含む10件の特別講演、67件のシンポジウム、36件の教育セッション、318件の一般口演、2,694件のポスター発表が行われて、最先端の脳科学の講演から神経内科の日々の臨床に関わる教育まで、広汎な領域に亘って学术交流が行われた【(4)参照】。

(3) 当会議における主な議題（テーマ）：

- ・ メインテーマ：「日本から明日の神経学を—神経疾患の克服をめざして—」

Theme（英語） Defining the Future of Neurology

主要題目：iPS, ブレイン・マシン・インタフェース, 神経疾患の分子機構, 脳機能画像、コネクトーム、脳回路/地図, 分子機能イメージング, ゲノム医学・診療, エピジェネティクス, 社会脳, 神経免疫学, 神経生理学, アンチエイジング, 在宅医療, 災害医療, 予防先制医療, 認知症, てんかん, 頭痛, 脳腫瘍, 神経外傷, 神経感染症, 神経変性疾患, プリオン病, 脳卒中 / 脳血管障害, 環境医学, 再生医療, 神経可塑性, 機能回復神経学, 神経リハビリテーション

(4) 当会議の主な成果(結果)、日本が果たした役割：

- ・ 前述の様に世界神経学会の構成国を超える世界の国々・地域から8600名を超える非常に多くの参加者があり歴史的な会議となった。ノーベル賞受賞者を含む最先端の神経科学から神経内科の日々の臨床に至るまで、様々な発表と討議が行われ、参加者は多くのことを学ぶと共に交流を深めた。企業展示、日本文化の紹介、文化交流イベントなどを通じても交流と相互理解が大きく進展した。大会の準備や運営は日本側委員と世界神経学会側委員から構成される委員会によりなされ、日本が果たした役割は極めて大きい。
- ・ 秋篠宮殿下・妃殿下のご臨席と、日本学術会議、日本医学会、日本医師会、文部科学省、厚生労働省のご支援もあり、世界と日本の参加者は神経学の意義を改めて認識することが出来た。

(5) 次回会議への動き：

会期中にすでに2019年にドバイで開催される次の第24回世界神経学会議の大会・学術プログラム合同委員会が開催されるなど、次への準備が本格化した。今回、日本人会員のための日本語による教育コースや日本式のスポンサー付きセミナーなど多くの新しい試みを行ったが、これらは次回以降の本会議の改革に大きく役立つと期待されている。

(6) 当会議開催中の模様：



9月17日 Opening Ceremony



Opening Ceremony  
で挨拶する水澤大会長



Opening Ceremony  
で挨拶する日本学術会議大西会長



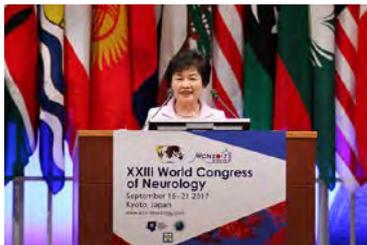
Opening Ceremony  
で挨拶する世界神経学会連合  
ラード シャキール会長



Opening Ceremony  
でご挨拶される秋篠宮殿下



Opening Ceremony  
にご臨席頂いた秋篠宮同妃両殿下



Opening Ceremony  
でご挨拶される厚生労働省 高木副大臣



Opening Ceremony  
でご挨拶される文部科学省 伊藤審議官



Opening Ceremony  
でご挨拶する日本医学会 稲垣幹事



Opening Ceremony  
でご挨拶する日本医師会 横倉会長



Opening Ceremony  
にご臨席頂いたご来賓



Opening Ceremony  
で挨拶する宇川大会長



9月17日 Plenary Lecture  
でご講演される利根川進先生



9月20日 Plenary Lecture  
でご講演される山中伸弥先生



・セッション会場風景



・展示・ポスター会場風景



・Closing Ceremony での挨拶・表彰式



(7) その他特筆すべき事項：

本会議の招致に当たっては、日本神経学会が2011年に国際化等の目的から招致の方針を決定し、2012年にサイトビジットを受け合格してから本格的な招致活動を行い、2013年の第21回世界神経学会議の折りの総会にて二度の投票を経て、韓国のソウル、中国・香港による香港との競争に打ち勝って選ばれた。わが国は1981年にすでに第12回の本会議を開催していることから不利な面もあったが、招致活動に際しては世界における先達の活躍に基づく日本と日本神経学会への深い信頼感を実感した。同じ都市で2回開催されるのはロンドンとウィーンに次で3番目で大変名誉なことである。

### 3 市民公開講座結果概要

#### 第58回日本神経学会学術大会/第23回世界神経学会議(WCN2017)市民公開講座

- (1) 開催日時：平成29年9月3日(日) 13:00~16:15
- (2) 開催場所：京都大学百周年時計台記念館
- (3) テーマ：神経難病に挑む・明るい未来に向けて
- (4) 参加者数、参加者の構成：111名 主に京都市在住の一般市民
- (5) 開催の意義：

神経内科では、頭痛、認知症、脳卒中など、比較的患者さんの多い病気から、患者さんの少ない神経難病まで、脳と神経にかかわる疾患を診断・治療している。その中で、従来治らないとされてきた神経難病が最新の分子遺伝学・医学の発展により、治る疾患に変化しつつある現状を紹介する企画を立てた。また、その診療科名の歴史から、一般の人々には、精神神経科、精神科、神経科、心療内科などと区別が付きにくい状態にある。今回、このような神経内科に対する認識不足や理解不足を改善し、一般市民の皆さんから神経内科に対して正しい理解を深めていただき、受診に際しても役立つようにも配慮した。
- (6) 社会に対する還元効果とその成果：

多くの市民の方々に参加してもらい、神経疾患と神経内科の現状を解っていただけたと考える。また、患者さん、ご家族の方々、市中病院の先生からも現場で困っていることについての質問も出て、当初の目的を達成できたと思われる。

#### 第23回世界神経学会議(WCN2017) Patients Awareness Day

- (1) 開催日時：成29年9月16日(土) 14:00~16:05
- (2) 開催場所：国立京都国際会館 アネックスホール1
- (3) テーマ：患者さんとともに神経疾患を考える
- (4) 参加者数、参加者の構成：143名 主に京都市在住の一般市民ならびに患者
- (5) 開催の意義：

神経難病の診療・ケアと今後の治療法開発には、医師・研究者の努力だけでなく、行政のサポート、患者の協力と社会の理解が不可欠である。本会ではまず世界神経学会会長がグローバルな視点から神経難病克服の重要性について述べた。引き続き神経難病患者の代表が2名、さらに患者参加型のユニークな学会運営で知られる世界パーキンソン病会議を主催する世界パーキンソン病連合の代表(米国人)が講演し、神経難病患者がどのような障害に苦しんでいるか、それにもかかわらず、いかに前向きに病気に立ち向かっているかを紹介した。その後で、医学界を代表して、これらの神経難病に対して最先端の治療法を開発している2名の研究者が最新の進歩について説明した。また厚労省健康局難病対策課課長補佐は行政の代表として、日本の先進的な難病医療体制構築の歴史と現在の取り組みを紹介した。
- (6) 社会に対する還元効果とその成果  
聴衆には一般市民に加えて、神経難病の患者も数多く参加し、一般市民と患者の両者に神経難病への社会全体での取り組みの現状および必要性をよく理解していただくとともに、神経難病の治療実現が目前であることを感じていただく貴重な機会となった。

#### 4 日本学術会議との共同主催の意義・成果

日本学術会議との共同主催により、日本を代表するレベルが高く内容の豊かな学術会議であることが担保され、日本医学会、日本医師会、脳科学学会連合、日本内科学会、日本精神神経学会、日本脳神経外科学会など多くの学術団体はもちろん文部科学省、厚生労働省を含めたオールジャパンの後援を受けて準備し、皇室のご臨席も仰いで開催することができた。また、地元である京都文化交流コンベンションビューロー、京都市、京都府からも全面的な支援をいただくことができ、多くの参加者に深い感銘を与えると共に、主催者の日本神経学会の会員はもちろん、色々支援をしてもらった学術団体の方々、また地元の方々にも様々な形で貢献できたものと思われる。